

学級・学年のない義務教育作りを想像する話

平成二十九年七月二日 (平成二十九年七月十日) づら研用資料) 鈴見咲 君高

学級制度を再考する動機

ほぼ無欠席でもひきこもりになる

私は物心ついたときから、周りとうまくやっていないことにとても苦労していました。ですが、周囲の人は勉強だけしていれば大丈夫！余計なことは考えるな！としか言いませんでした。

この結果、小中高とほぼ無欠席で教育を受けたにも関わらず、大学で完全に行き詰まってしまい、中退後は合計16年のひきこもり当事者になるしかありませんでした。

義務教育をほぼ完全に受けていた、しかも自分の気持ちや磨り潰しながら従っていたにも関わらず、ひきこもりに追い込まれました。これは私に対する義務教育の欠陥と言っているのではないのでしょうか。憲法第二十六条にいう「能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利」が満たされていないからです。

これは飽くまで、全部こなしてもダメな義務教育には問題がある、という話です。不登校を含む欠席が多かった生徒についても、そうならざるを得ないような義務教育制度がやはり問題なのです。

でも現場は疲れ切っている

ひきこもり・不登校に関連して、学校にああしてほしい、こうしてほしいという希望はそれぞれたくさんあると思います。ところが、伝え聞くところでは現状ですでに先生方が疲れ切っている、ブラック労働が常態化しているということのようです。

ひきこもり以外の問題についても、あれをやれ、これをやれと仕事を増やす一方で、先生方の労働時間は一切配慮されなかった。もはやひきこもり・不登校問題にだけ対応してくれ、と言える状況ではなさそうなのです。

いろいろな教育問題が解決しない理由

だからといって、要求を取り下げているものはありません。ですが、不登校やひきこもり以外にも含めた教育問題全体を見渡すと、学級・学年制度こそが、文字通り諸悪の根源ではないかと思えるようになります。何があっても守られてきた学級制度の問題とは何か。次の通りです。

詰め込みもゆとりも同じ失敗教育

たとえば、ゆとり教育が問題視されてからもう長くなりますが、それ以前は詰め込み教育が問題視されてきました。

詰め込み教育の苦しさが決定的に明らかになったのは、小中学校の先生方への調査によるものでした。自分の授業を受けている生徒の半分は内容を理解していないだろう、と回答した先生が多数にのぼったというのです。これをきっかけに最初のゆとり教育が始まったという話があり、実は一九七二(昭和四十七)年という昔のことです。それ以降、概ね学習量を減らす方向に進んできました。

さて、詰め込み教育の問題は、学習量が多すぎるからだという理由に回収されましたが、本当にそうだったのでしょうか？

もし、個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わせて教育する体制ができていたら、教室の半分が授業を理解していない状況が構造的に存在しなかったはずです。

一方のゆとり教育。全員が理解できる最低限の内容に絞るのは良かったとしても、学習の先取りは認められませんでした。後になって発展的な内容は認めることになりましたが、個人単位で積極的に先に進めるような話にはなりませんでした。

さて、ゆとり教育の問題は、学習量が少なすぎる

ことだと言われましたが、本当にそうでしょうか？
もし、個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わせる教育する体制ができていたら、全体の学力平均が下がることはなかったのではないのでしょうか。

詰め込みとゆとり。正反対の視点のように思えますが、結局の所どちらも学級制度の死守が人の成長を妨げています。

高校全入運動は何を目指したか

「十五の春を泣かせない」というのは昭和30年代の京都府知事の政策標語でした。高校進学率、ひいては大学進学率を上げて高い教育を受けた労働者を増やそうというものでしたが、十五歳の春に泣く、つまり高校進学に失敗して強い打撃を受けるのは、高校受験が十五歳で固められているから、しかもそれが全員に及んでいるからではなかったでしょうか。
もし、個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わせる教育する体制ができていたら、打撃は受けても人生全てにかかるようなことにはならないはずで

同年度生の比べっこは何のため？

幼稚園や小中高大の各受験・就職活動までを目標に、同年齢集団の比べっこが大変盛んです。

年齢に対して極端に能力が乏しい子を見つけ、早めの手を打てるという点では大変有用ですが、これ以外の意味はありますか？

現在の義務教育の成績は、クラスや学年の中の位

置ではなく、どれだけ理解したかでつけられているます。教育するからには、全員の理解が一応の目標のはずだからです。

実際には、全国的に行われる到達度調査テストをネタに、個人別・県別・学校別の視点はあるにせよ、学年内縛りでの順位で大人が一喜一憂しています。一般論として、いろいろ縛りをかけた中で競争を見るのは皆さん大好きです。スポーツ・ゲーム、そして、受験勉強。

未成年を使った競争娯楽を楽しみたいから、落ちこぼれでも留年はないし、発展学習は認めても先取り学習は認めないのです。教育上の理由は何もありません。

留年で他の子と離れてしまうのはかわいそう。なぜかわいそうなのか。べつたりひつついている学年集団を作っているからです。

もし、個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わせる教育する体制ができていたら、ちよつと足踏みになるけれど、結局は長時間かつ長時間、わからない授業に在籍する苦痛を味わう必要がなくなります。先取り学習を試みたいけど飛び級は気が引ける。なぜ気が引けるのか。学ぶために他の全てを捨てなくてはならないからです。

もし、個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わせる教育する体制ができていたら、友達関係は維持したまま、自分が先に進みたい強化の分だけ先に進めることができましたでしょう。

世の中にはもちろん競争があります。でもそれは、

受験勉強のそれではない。受験勉強は未成年を使つたスポーツ観戦と同じで、全員の教育に必要なものではありません。

細かすぎる採点基準は必要か？

スポーツ観戦のような高みの見物に似ているという点では、テストの採点でも同じようなことが言えます。掛算の順序問題と、漢字に関するいろいろな採点とがわかりやすい事例になるでしょう。

ドーナツが五つずつ載っているお皿が三枚あります。ドーナツは全部でいくつでしょう。5×3=15なら満点で、3×5=15なら減点にする教育がありますが、そんなことをする必要が、小学生にありませんか？

このような採点をする理由として、文章題から「ずつ」などのキーワードをひきだし、掛算記号の前後を合わせるように教えないと、数字だけ拾う子がいる、という反論があるようです。

でも、なぜ文章の意味がわかっていない子もその縛りに付き合う必要があるのか。そして、その反論理由になっっている子の算数能力は低いままではないのかという疑問には応えられません。

もし、個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わせる教育する体制ができていたら、わかっている子に余分な負担は必要ないし、わからない子にはしっかり指導ができたはずで

一方の漢字教育。少し前に留めはね・書き順・送

り仮名には極端な指導をしないという再確認の通達
が出されて騒ぎになりました。実は文部省の時代か
ら60年以上、漢字の許容範囲は広く取るように明記
されていたからです。

なぜ厳しくなったのか？一つはチマチマ指導を入
れるのは楽しいということ。もう一つは、学級・学
年内での相対評価基準は多いほどやりやすいとい
うこと。

**もし、個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わ
せて教育する体制ができていたら**、余分な採点基準
に気を遣わない分だけ、漢字の性質を知る幼い時期
がもっと豊かであったと思うのです。

戦前は送り仮名ではなくだいたい振り仮名だった
とか、部首は漢字辞典の便利さの為にあるのだから
辞書が進化すれば漢字の部首が変わるのも当たり前
だとか、書体によって長さや留めはね・書き順が変
わるのは当然だとか：

傷害の影響が深刻化する理由

未成年同士での傷害、要するにいじめなんです
が、発生したり深刻な状況になったりする理由の一
つが「逃げられないから」というものです。

なぜ逃げられないかというと、同じ年度に生まれ
た集団が、同じ時期に同じ教育を受ける前提にな
っていて、逃げる先が真っ暗に見える、または逃げる
こと自体が想像できないことによります。

残念ながらどうい制度にしても子供同士の傷害

は起こると言われています。そうだとすると、回復
がひどく遅れたり回復できなくなったりする理由は、
やはり逃げられない、逃げたり放り出されたりした
らもう戻れないと考えてしまう点にあります。

**もし、個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わ
せて教育する体制ができていたら**、少なくとも完全
な真っ暗にはなりません：と言いたいところですが、
こればかりは傷害の発生状況にもよるでしょう。

被害者・加害者を出さない対策はいろいろ取られ
るでしょうが、ここで絶対大丈夫というのは無責任
のように思います。

ただ、再び良い意味で動き出したときの疎外感
大きく和らぐと考えられます。個別の能力に
応じて教育を受ける権利、という視点からの配慮が日頃か
ら貫かれていけば少なくとも今よりは被害の影響が
小さくなるでしょう。

不登校などが深刻化する理由

不登校、ついでにひきこもりが深刻化するのも、
就職から人生設計に至るまで教育制度の影響がある
からでしょう。

大学ともなれば進学率は五割、全部が全部とい
うこともないはずですが、一年浪人ですら大学内で気
を使うという話が以前のづら研で出ました。同じ立
ち位置の人が全員同年度生まれなのが当たり前だっ
たので、そうではない人がいることに強い違和感を
感じてしまうのです。

入り込めても違和感を感じるなら、入り込めない
人の悩みはより深刻でしょう。

**もし、個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わ
せて教育する体制ができていたら**。

小学生の頃から、一年以上誕生日の違う子が同じ
ような勉強をしている機会がいくらでもある。逆に
誕生日の近い子がものすごく先の勉強や自分ならと
つくにわかっている勉強をしていることもよく見て
いる。

大学で年齢差のある状況を見たとしても、あ
あすこいね、とか、今まで苦労したんだね、で終わるよ
うになるはずです。それで終われないのは、同年度
の人の人生幅が幼い頃から強気に狭められているか
らです。

過疎地教育が深刻化する理由

一学年で一クラスにできない小学校や中学校。過
疎地で暮らす子供は高校に通うために住み慣れたと
ころを出て行く、といいます。理由はもちろん、集
団教育しか用意されていないからです。

過疎地ばかりではありません。親が転勤族で、転
勤するたび転校する子供は、そのたびに新しい集団
に馴染めるかどうか死活問題になります。

**もし、個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わ
せて教育する体制ができていたら**、別に過疎地に暮
らしたままでも十分な教育ができることになりま
す。過疎地や転勤族の子が立ち後れ感を持ってしま

理由は、学級集団による授業が日本の当たり前になっているからです。むしろいろいろな場所といるるな暮らしがあるのなら、それらを前提にした教育があつて当然で、そういう教材がないから過疎地はもつと過疎地になる。当たり前前の話です。

親への不満も一部は不当？

小さい頃、漫画を買ってもらえず学校で会話について行けなかった。テレビを見せてもらえず、ゲームを買ってもらえず：今なら携帯電話を持たせてもらえないとか、LINEを使わせてくれないとかも入るでしょう。

これらの不満は後で逆方向に大爆発する事例として知られるようになってきました。私も例に漏れない側の人間です。ただ、親の禁止が徹底していなかったために「大」爆発はしませんでした。

ですが、学級制度のような粘着関係がなかったら、極端に悩むことはなかったのではないのでしょうか。

粘着関係があるから、みんながやっていることを禁止されると死活問題になるのです。過剰な禁止が問題を招くことは変わりませんが、深刻化という点から見れば、親は部分的にとぼちりを受けていると言えそうです。

「分け」られた「全員」の苦しみ

障害児教育の文脈も含む話として、以前のづら研で小沢牧子さんによる「分けるな」という主張が紹

介されました。分ければ分けられた方だけでなく、残った方も縛りが厳しくなり、どっちも苦しくなってしまうのだ、とも。

紹介された話では、不登校や障害児が分けられた側で、元の集団は分けられていないという暗黙の了解がある、というか、そのことは意識すらされていないようにも思えます。

さて。

ここまで強調してきた文を確認して頂きたいと思えます。「もし、**個人単位・教科単位で生徒の理解度に合わせて教育する体制ができていたら**」。

それができていない今とはどういう状態かという点、本来少しずつ重なっているだけの子供集団が、誕生日による同年度集団に「分けられ」て、学年単位・学級単位で理解度と関係の無い教育がされている、と言えます。

生活上は、その中からはみ出ずに競争することを強いられています。分けられることが原因の無駄で余計な苦しみは、不登校などの少数派だけではない、日本の教育制度下にいた全員の苦しみなのです。

個別現場対応の限界

個別の事情をよく見ることは大切です。

その一方で、個別対応にどこか無理を感じざるを得ないのは、ここまで示した根本の問題が変わっていないからだとも言えます。

今を生き抜くための現場対応は必要です。同時に、

未来に希望を持つための考え方も必要です。

前回同様今回も、この「未来に希望を持つための考え方」だと思っています。今を生きるために未来への考え方を捨てさせるのであれば、結局今を生きるための行動も意味がなくなってしまうのです。

私の計16年がそうであったように。

予算や時間と学級学年制度

何のかんの言つても、現状予算が足りてません。軍備やら既得権益やら考えると、本当に足りてないのか疑問の向きもありますが、それはそれとして、今ある教育資源で「学級をなくすと先生の負担がどうなるか」を検討するのは面白い試みで、かつ大事だと思えます。

小さなものでは始まりや終わりの各式、定期テスト、一斉に行う朝礼・給食・掃除、修学旅行や身体測定など、学級を前提としなければ負担が減る行事や成り立たない行事があります。ここではより大きなものに注目してみます。

部活動

部活動の利点はいろいろに語られますが、数々の問題点が致命的に悪い。世間で言われている欠点に加えて、学年で子供を分ける悪影響をさらに強めている点も指摘しなくてはなりません。

部活動でしか解決できない問題があるのなら、そ

これは先生方の無償労働で解決して良い問題ではありません。また、過疎校などでは先生の負担も合わせて小規模な部活動しか成り立たない以上、巨大な人や金が動く部活動が必要とも思えません。

授業そのものと授業の準備

学校は効率よく教育するための仕組みのほずですが、現状、能力別ではない集団に授業をしているため、効率が殺されています。落ちこぼれやら吹きこぼれやら学級崩壊やらで、これらを防ぐことこそが先生の先生たる意味のようになっていきます。

ですが：この意味の学級運営って教育に必要でしょうか？まして座学に至っては、進研ゼミをはじめとする自習教材ががつり進歩してきたわけですから、授業すらいららないと言えませんか。

知識ではない教育という面では、学校の授業を通して児童生徒に寄り添う、という考え方があるようです。荒れている生徒をとりあえず学校に呼ぶ。座っているだけでいいから授業に出なさいと指導する。で、授業で暴れる。荒れている本人も教室と自分との違和感があつて大変でしょう。

おかしな制度のために、本来不要な能力が要求されています。要求される先生方もいい迷惑です。

一つの部屋で、能力差のある子をまとめる能力は、少なくともここまで必要ではない。これで助かる先生はたくさんいると思います。

加えて座学に関する準備が省ける、となると先生

方の負担はかなり楽になる、少なくとも必要な所によりの確に力を注げるようになるでしょう。

余談

学級制度とは関係なさそうな問題

一昨年の末に話題になった「国や教育委員会からの調査への対応」とか「保護者や地域からの苦情対応」などは、実のところ先生の時間を食い潰す問題のうち最上位の二つですが、幸か不幸か直接的には学級・学年制度とは関係なさそうです。

自分を変える、とは

相手は変わらないのだから、自分が変わっていく。状況打開にはよく言われる言葉で、実行できるのであれば効果のある考え方です。

が、そこで終わっていないのか。

今回と前回の話題提供は、私だけが理解する、で済ましていいのかという思いのもとに書かれています。

規則を変えることは権力を使うこと

先ほどとは逆の視点で、制度を変えることは、しばしば誰かを変えることであり、あけすけに言えば

人を変える、支配欲の表れだと言うことができます。今の制度を作った人もそうだったし、今回の話題を書いた私もそうです。

規則や制度の公平さが求められるのは、支配性をゼロにするためだということを忘れないようにしたいと思います。

学校への希望が自分を縛ることもある

学校や親にああしてほしかった、こうしてほしかったと思う内容によっては、根本の問題である『誕生日で人を分ける』ことへの支持を意味することもあります。そのことへの内政も必要になるでしょう。

予算と人材があるなら

金や人に余裕があるのなら、多くの問題はここまですごじれなかったかもしれない。逃げたい側は好きだけ逃げられ、少数派の集まりにも好きだけ行けるからです。

ただし、考え方の準備ができていなければ、何かの拍子に機会が目の前に来ても十分な活動はできないのではないかと考えます。

書きたかったこと

日本の不幸は根深い常識にあるんじゃないかな。